
殺蟬事件

非国民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺蟬事件

【Nコード】

N0036F

【作者名】

非国民

【あらすじ】

夏の暑い日。私達はやってしまったんです。

ある、うだる様な暑さの中、私達はゴロゴロと惰眠を貪ってたんだ。

すると、どこからか、セミの鳴き声が聞こえてきた。ミンミンミン。ミンミンミンミン。その鳴き声を聞くと、ただでさえ暑いのに、余計暑く感じちゃう。

「この鳴き声って、嫌よねえ……。」

「本当だよね。」

誰に言っただでもなく、ただ呟いただけのその言葉に意味はなく、返事を期待してた訳ではなかった。だから、余計に返事が返ってきた事に驚いた。

「あ、貴女。一体いつからそこに？」

ベランダに座る義妹に問う。

「ん？ 私はずっといたよ？ お義姉ちゃんが気持ちよさそうに寝てたから、声はかけなかったけど。」

悪だびれた様子もなく、義妹は首を傾げる。その様子に、ぶりっ子振って。と、心の中で思ったが、口には出さなかった。

暫くの間、その鬱陶しい鳴き声の中、眠ろうと眼をつむっていたが、やはり眠れる訳もなく、私はガバッと跳ね起きると、一階に向けて走り出した。その突然の動きに、義妹がビクッと飛び起きたが、私は気付かない振りをした。

階段を下りると、義兄が窓をじっと眺めていた。声を掛けようかと思ったが、熱心に見入っているため、声を掛けるのに躊躇する。私は、暫くそのまま義兄を見ていたが、一向に動く気配がない。何をそんなに見つめてるのか興味がでてきた私は、

「お義兄ちゃん何を見てるの？」と、義兄に声を掛けてみた。

「ん？ いや、何もないよ。」

何もない。と、いう割には、義兄はまだ窓を見つめている。その姿により、好奇心をくすぐられた私は、義兄の隣へと歩み寄る。

「ねえ。私にも見せて？」

「ん？ ああ、いいよ。」

ドキドキしながらも、私は義兄の見ていたところをしてみる。そこには、茶色と黒のまだら模様の羽をもつ、奇妙な生き物がいた。

「ひゃっ？ ひゃああああっ！！」

私は驚きのあまり、その場から飛びのく。義兄がそれを見て、クスリと笑みを浮かべる。

「どうしたんだ？ 急に。」

「だ、だ、だ、だって、バルタン星人が。」

「バルタン星人じゃなく、セミだって。」

「に、似た様なものじゃん！」

かなり動揺してるのが、自分でも分かる。まあ、虫全般が苦手とというのが動揺の原因なのだが。

今の騒ぎを聞き付けてか、義妹が慌てて降りてくる。と、それを待ってたと言わんばかりに、セミがその場からとびたつた。沢山のおしっこを撒き散らせながら。

「キャッ！」

そのおしっこが、私達の頭上へと降り注ぐ。

「もう！ 汚い！」

「うわっ！」

義兄の顔色が変わってくるのが分かる。かくいう私も少し頭にきたんだが。

「こいつ……。待ちやがれ！！」

義兄が、セミを一心不乱に追い掛ける。セミも遊んでいるのか、義兄の手の届きそうで届かない位置をキープしながら、あっちいたり、こっちいたり、飛び回る。

「くそっ！ 待て！」

そうは言ってみたものの、セミが待つ訳はなく、ただただ、不毛

な一人ダンスが続けられている。私は小さく息を吐き、義兄と共にセミを捕まえることにした。

「お義兄ちゃん、私も手伝うわ。」

「私も手伝う!!」

私の言葉を聞いてか、義妹も即座に手を挙げる。瞳が輝いていることから、彼女はワクワクしていたのだろう。

思わぬ参加者にセミも様子を見ることにしたのか、天井に張り付き、また鳴き始める。

「こらあっ! 早く降りてこおい!!」

気の短い義妹が、セミの下をクルクル回りながら、降りてこいと叫ぶ。それを嘲笑うかの様に、セミはまた、おしっこを撒き散らせ飛び立った。

だが、その瞬間を見逃す義妹ではない。飛び立つ瞬間に一瞬高度が下がるのを義妹は捕えたのだ。

ビタン!

床に叩き付けられたセミが衝撃で気を失う。それと同時に、妹も着地を決めた。

「ふっ。私にかかればこんなものよ。」

義妹の顔はどこか誇らしげで、一つの大きな仕事をやり終えた、勇者のようだった。

「で、でもよ。こいつ、死んじゃったのかな?」

義兄がツンツンと、突く。動かない……。

「お、おい、やばいって。死んじゃってる……。」

「ほ、本当!?!」

義妹が顔を真っ青にして駆け寄ってくる。私も、その後ろに着いていく。義兄妹達とセミの亡きがらを見、私の頬をあたたかい雫が伝っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0036f/>

殺蟬事件

2010年11月18日12時43分発行